

# 北海道における「ある戦後精神」の死 十亀昭雄先生を偲んで

山内亮史

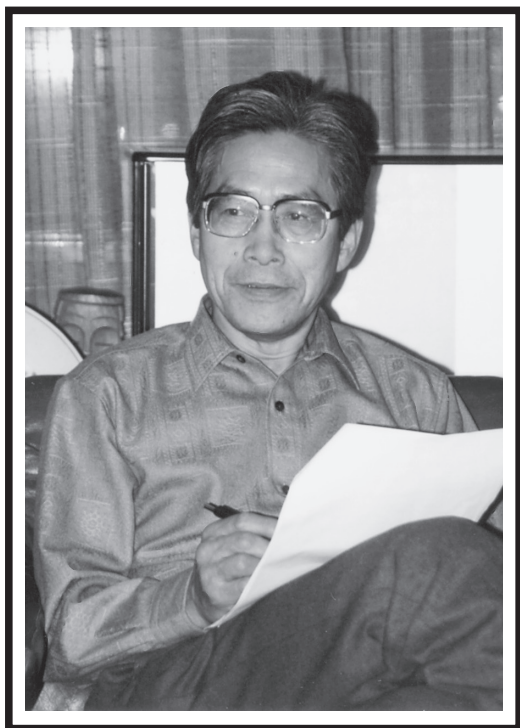
旭川大学学長

(1)五十嵐広三氏と十亀昭雄先生

今年五月、五十嵐広三氏が逝って、後を追うように十亀昭雄先生が他界された。

このお二人は、私にとって「政治的なるもの」を考える際いつも基軸となる存在であった。

五十嵐氏は、元旭川市長を経て、北海道知事選挙を二度戦い、衆議院議員となり、細川内閣で建設大臣、自社さ連立村山内閣の官房



1994年12月26日、95年新年号座談会において

長官となり、惜しまれつつ引退した。この政治キャリアの大部分を日本社会党の黨員として過ごしている。私はこの人とかなり身近に接してきたことを誇りとする。

それは私の価値志向からすれば「有限な資源の権威的配分技術」としての政治より、「可能性のアート（技術）」としての政治をよしとするからである。近年この政治家ほど国家の中枢において理想を具現化しようと粉骨碎身の姿を感じさせた人はいない。いずれ何らかのかたちで、この二人のことを書きたいと思っている。

この五十嵐氏が十亀先生についてうめくように言った忘れられない記憶がある。それは五十嵐さんが道知事選挙に出馬することになり、私は「五十嵐広三さんと新しい北海道をつくる青年の会」を旭川で立ち上げて話し合っていたときであった。五十嵐知事実現の戦略は、札幌をどうするかにかかっており、札幌市長候補が誰になるかが大きな鍵であった。

そのとき北海道新聞一面に「札幌市長候補に十亀昭雄氏」の三段抜き見出しが躍った。そのとき五十嵐さんは、「うーん、これで十亀先生は出馬できなくなるな」とうめくように言ったのである。

私が驚いたのはそのリアリズムである。五十嵐さんの情報ネットワークとある種の彼の政治勘はものすごいものがあり、「私はなぜですか」と意気込んできた。それによると、札幌段階で、道と札幌、党と全道労協、選対と党本部、そして国会議員と地方議員等々

の間で、戦略に基づく指揮命令系統がまだはつきりしておらず、これは誰かのリンクではないのか、ということであった。

私はすぐ十亀先生に電話をした。先生は全く冷静で「正式に代表者が来て要請された訳ではないんだよ、たとえ誰がきても僕は全く出る気はない。五十嵐さんよろしく」というのであった。その後札幌市長選挙には、川村琢北大名誉教授が出馬したが、大敗した。

私は、十亀先生のためにほっとしたが、五十嵐さんのためには勝利の目算が全く狂ってしまったと思った。

## (2) 「丸山狂い」の頃―十亀先生との出会い

私は北海道学芸大学（現北海道教育大学札幌校）に四年、北大大学院に五年いたが、骨格となる社会科学の基礎は、文献読書に限っていた。ほぼ大学二、三年のときに仕込むことができたと思っている。それは十亀先生との出会いが大きかった。六〇年安保と七〇年安保の狭間の時代で、私は二十歳の未熟者であった。

当時十亀先生は、北大助手を経て、東大に研究生として、辻清明、丸山真男先生の指導を受け、マッケンジーの「近代政党論」を研究して論文を発表、教育大の助教授として最も精力的に研究・教育に打ち込まれていたときであった。

私は先生の「政治学概論」「政治学特講」を通して高校のときとは打って変わって勉強に夢中になった。

マルクス、サルトル、ウエーバーの入門からはじまり、大塚久雄、宇野弘蔵、大河内一男、川島武宣、梅本克巳、黒田寛一、吉本隆明等々を読みあさっていた。これらは、私が社会学の江沢繁先生のゼミ生でありながら、出席を許された十亀ゼミで誰ともなく飛び交った当時の社会科学や思想の動向とシンクロしていた。

そして三年目のとき北大から松沢弘陽先生が特講に来てくれるの

である。この丸山真男直系の先生を通して、より深く社会科学の世界に入り込むことができたのである。松沢先生は、北大の法学部での聴講や大学院に行つてからの聴講も許可してくださり、そこで山本佐門氏と出会ったりした。その他私的に「内村鑑三読書会」「矢内原忠雄読書会」にお誘いいただき、自己形成のための豊かな時間をいただいたと思う。

こう考えると十亀先生は私の様々な精神世界への道案内の役割を果たして下さったと思う。とりわけ、十亀先生は息子さんの名前に「真志」と丸山真男の真をとつてつけるほどのファンであった。未会社の『現代政治の思想と行動』の並製上下二冊本の魅力は絶大で、私たちの知的共通基盤はこれであった。

そして同じ丸山門下の松下圭一『現代政治の条件』所収の「大衆国家の成立と問題性」にはしびれてしまつたりした。次々と十亀ゼミの中で、これらを紹介する私を学生というより、後輩のような態度で接して下さり、自宅にも呼ばれ、恵利子夫人やお子様とも親しくさせていたのであった。

## (3) 「悔恨共同体」としての戦後精神

十亀昭雄先生の世代の特質は旧制中学から北大予科へといった履歴の中で死と直面していたことである。先生の言い方を借りると「皆いつか軍隊に入り戦争に行き死ぬんだ、と思っていたんだ」ということになる。

丸山真男は「日本政治思想史研究」の原稿を朝まで書き続け二等兵として入隊したし、五十嵐広三さんは、仮想敵を相手に手榴弾を投げる訓練をしていた。

これら「失われた世代」ロストジェネレーションの戦後の立ち位置は、昨日までの大日本帝国の実在とGHQ、そして「獄中一〇年」

の抵抗故に無謬性と一枚岩の権威と化した日本共産党との距離感に在った。

丸山政治学の魅力の一つは、講座派の日本資本主義分析、とりわけ「型」の把握を取り入れていることにある。そして近代の民主主義が、日本のような国にあつては、相対的に左の集団によって担われるという命題。また天皇制の下では、「労働組合」が絶えず自己点検の自覚を持たなければ、国家にからめとられてしまうという認識の必要性があつた。丸山政治学のリアリズムの一面である。

丸山真男が当時どこかの座談会で、「綱領的にいえば全く民社党と私は重なるが、行動からいえば全く反対の立場となる」という旨の発言を読んだことがあつた。そして「スターリン批判」を経て非マルクス主義リベラル、市民派が誕生していく。十亀先生はこれと軌を一にしながらも実践的にはより禁欲的であつたと思う。推し量れば、当時の教育大札幌校は、正統派マルクス主義教授が圧倒的に多く、孤立せずに自己の信条を守るのに苦労しているかにみえた。

ともあれ「もう二度とあのような戦争をしてはならない」という合意の下、知識人がまとまる「悔恨共同体」が護憲をスローガンに成立していた。そしてそれが戦後精神の一つの最大公約数であつた。十亀先生が、主として日本社会党、総評系労働組合から講演を依頼され、時間の許す限り積極的に出かけていかれたのは、北海道における丸山真男的価値観を受容していたからに他ならないと思う。

当時日本社会党という政党は、労働組合が大きな勢力であつたし、その下にキリスト者、女性活動家、農民連盟、非共産系知識人等々によって構成されていた。戦後精神もある種現していたのである。後年十亀先生は、北海道の初代民選知事であつた田中敏文氏と文通をしていたと私に語ってくれ、田中氏は時代の空気が作った知事だつたといつた。

#### (4) 「田舎の政治学者」の矜持で

十亀昭雄先生が「日本政治学会年報」に、北海道の四つの革新自治体比較研究の論文を発表したのは一九八〇年代初頭のことだつたらうか。四つとは、吉村博市長の帯広市、山口哲夫市長の釧路市、宇佐見福生市長の北見市、そして五十嵐広三市長の旭川市である。今日読んでみてもその筆は冴えている。まちづくりの理念、市長のリーダーシップの型、都市の性格、財政状況と北海道在住の政治学者ならではの視点が活写されている。

さらに八〇年代から九〇年代までおよそ二〇年間、主として「北海道自治研究」誌上に各級選挙分析研究を行っている。その際、基本認識に置いたのは、北海道の政治風土の革新性と保守性の二重構造の問題であつた。組織選挙が官と民で、開発依存の下、労組と企業に等分されており、市民社会の不在が、時々の風の行方で浮動票が動き、勝敗が決まる構造である。

その上で「革新王国」などといわれたのである。先生が分析をやめられてから今その分析枠の有効性は少なくとも前回の衆院選で崩れたのではないだろうか。先生は自ら「田舎の政治学者」を自称していたが、後進の政治学者に期待していたであろう。

私が先生に最後にお目にかかったのは、南区南の沢にある特養ホームの一室であつた。そのとき先生は私の目をみるなり「ああ山内君か、僕はもうこんな風にポロポロになってしまつてね」と言うのであつた。居合わせた奥様は後に手紙をくださり、「あんな正気の会話は近頃ありませんでした」とのことであつた。

私はかけがえない若い日に会えたような懐かしさに胸が鳴つた。

(合掌)